



Title	<書評>下地ローレンス吉考『「混血」と「日本人」：ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』（青土社、2018年）
Author(s)	趙, 世珍
Citation	日本学報. 2020, 39, p. 96-104
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85167
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【書評】

下地ローレンス吉孝『「混血」と「日本人」：
ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』（青土社，2018）

趙 世珍

本書は「混血」や「ハーフ」と呼ばれた人々はいかに人種化されてきたのか。実際に引かれた境界線は、現実世界に具体的にどのように作用し、それはどう生きられてきたのか（13頁）という問いを立て、彼らをめぐる社会状況、政策、メディア言説を敗戦後から現在まで通史的に検討（第1部）したうえで、当事者への聞き取り調査に基づいた生活史分析（第2部）を行ったものである。このような歴史学かつ社会学的な分析を通して本書は、「日本人」と「外国人」という日本社会に浸透する強力な二分法の人種編成が、「ハーフ」をめぐって作動してきたことを論じている。

Mixed-Race/Multiracial（以下では「ハーフ」とする）の研究状況を見ると、イギリスやアメリカのような多人種化が進んだ西欧社会を対象にするもの [Aspinall ほか編 2013など]が多いが、近年には非白人間の「ハーフ」 [Rondilla ほか編 2017]，アジア社会における「ハーフ」 [Rocha ほか編 2017] など、研究対象が広がっている。「ハーフ」を取り巻く状況が日本と類似する韓国における「ハーフ」のメディア表象を研究した著作も、本書と同じ時期に出版されている [Ahn 2018]。

日本の「ハーフ」の研究は、著者の指摘の通り、エスニック・グループを前提とした既存の研究の枠組みにおいて、長い間見逃されてきた。近年になって『〈ハーフ〉とは誰か』（岩淵編，2014），『人種神話を解体する：「血」の政治学を越えて』（川島・竹沢編，2016）など、少しずつ成果がまとめられている。その成果のうえで本書は、日本現代史のなかで「ハーフ」をめぐりさまざまな出来事をまとめ全体像を提示し、新たな到達点を示した。

私の出身国は韓国であるが、本書が取り上げる日本社会の状況は、韓国社会のそれとも類似したところが多く、韓国の「ハーフ」をめぐり問題を考えるうえでの大きな刺激となった。韓国では、近年増加している国際結婚から生まれた「ハ

ーフ」に関する議論は多く見られるが、その議論を米軍基地関係で生まれた人びとに関する議論と繋げて考えようとする試みはそれほど多くない。本研究の枠組みは、「ハーフ」の問題を考えるうえで、歴史的な視点を参照することの重要性を説得的に提示した。また、ルーツと年齢の異なる28名の「ハーフ」への聞き取りに基づいた丁寧な記述は、「ハーフ」の立場を経験したことのない多くの読者が無意識的に内在化してきた人種化の視線を反省的に振り返ることを促すものであり、生活史研究の強みを活かした成果であると考えられる。

以下では、本書の内容、および特徴をまとめたあと、私の意見を述べることにしたい。

* * *

本書はオミとヴィナントの「人種編成論 Racial Formation」を参照し、マクロレベル（社会変動に伴う政策、メディア）、メゾレベル（学校、職場など制度）、ミクロレベル（人びとの相互作用）における状況の分析を行う。第1部では、マクロレベルで「日本人」／「外国人」の二分法的な思考が継続されていることを論じ、第2部では、当事者の生きられた経験を取り上げ、メゾとミクロレベルにおいて彼らがどのような人種化の眼差しを経験しているかを提示している。

戦後70年に渡る長い期間において日本社会を生きてきた様々なルーツを持つ「ハーフ」を、包括的かつ体系的に取り上げるために、本書は「四つの時代」と「三つの位相」によって「ハーフ」の歴史を捉える。時代は① 第1期：1945年から1969年まで、② 第2期：1970年代から80年代まで、③ 第3期：1990年代から2000前半まで、④ 第4期：2000年代後半から現在まで、として分類される。位相は「ハーフ」の背景に関するものであり、① 基地駐留の影響によるケース（位相I）、② コロニアリズムの影響によるケース（位相II）、③ グローバル化の影響によるケース（位相III）として分類される。

第1章の「敗戦と「混血児問題」の時代」（1945年～1969年）では、「戦後の「日本人」というアイデンティティや意味づけはどのように構築」されたかを、① 旧植民地出身者の法的位置付けの変動、② 「混血児問題」を通じた「混血児」の人種化の観点から論じている。戦後旧植民地出身者には日本国籍を喪失させる措置が取られ、外国籍になった旧植民地出身の男性と日本人女性の間で生まれた子供は、国籍付与における父系血統主義のもとで法的に「外国人」となった。「混血児問題」は、米軍基地の周辺で米軍人と日本人女性との間で生まれた子どもたちが社会問題化されたものであるが、政府の認識には「混血児」を「日本人種と著しく相異している者」にする「混血児」の人種化が現れる。また日本政府は「混

血児問題」に対して「同化」を基本方針とし、積極的に対応策を講じず、問題を不可視化した。

第2章の「豊かさと「ハーフ」の時代」(1970年～1989年)では、日本が消費社会に進入するなか、白人系女性の「ハーフ」が西欧の豊かさを想起させるシンボルとして、メディアで多く取り上げられる「ハーフブーム」の時代を論じている。この時期では、アイドルグループや雑誌モデルとしての「ハーフ」像によって、ポジティブな「ハーフ」のイメージが流布した。しかし「女性化された」これらの表象は、日本の経済成長が続くなかで氾濫した「日本人論」によって支えられた「男性化された「日本人」イメージ」を揺らがせることはなかった(164頁)。

第3章の「「多文化共生」と「ダブル」の時代」(1990年～2000年)は、アジア諸国からの労働移民、国際結婚、留学生の増加など、日本社会の構成員が多様化する時期を論じている。1990年に改定された入管法では、「系譜的に「日本人の血」を持つ」ものが優遇されるという「血のロジック」が働き(189頁)、日本政府が2006年より推進した「多文化共生」の施策は、「「日本人」「日本文化」の同質性・固定性・自明性を前提」(208頁)にしたものであった。市民社会では、「混血児」という単語の使用禁止運動、「ハーフ」を代替するものとして「ダブル」というネーミングが見られた。

第4章の「ハーフ」の多様化の時代(2010年代～)では、「日系定住外国人」を中心とする外国人政策のあり方に依然として存在した「血のロジック」へのこだわり、位相皿の若い世代が増加することに伴う「ハーフ」イメージの多様化を論じている。若い世代の「ハーフ」の表象において、犯罪や暴力など「否定的なニュアンスとして用いられるケース」(226頁)も増加しているが、他方では「自らの経験を積極的に発信する主体」(230頁)としての「ハーフ」像も目につくようになったことを指摘している。

第2部では、28名の当事者たちへの聞き取り調査に基づき、人びとの相互作用のなか、また学校や職場といった社会制度において、どのような問題に直面しているかが論じられている。調査対象者は、50代2名、30代3名、20代23名であり、世代の偏りが見られる。片親の国籍は、アメリカ、ドミニカ共和国、バングラデシュ、フィリピン、韓国など多様である。

第5章の「あなたはナニジン？」では、人種化の作用が、人種やジェンダー、セクシュアリティ、階級、ナショナリティといった複数の要素から当事者に影響をもたらすことを論じている。東アジア系ではない「ハーフ」は、外見によって「外国人」とであると判断されやすいため、外国人にかけられる質問に日常的に晒され、他者化を経験する。また女性の「ハーフ」は、「外国人の女性は性的に解放的だ」というイメージが投げかけられるなど、他者化がセクシュアル・ハラスメ

ントに繋がる場合もある。第6章の「「ハーフ」の捉えがたさ」では、3つの位相における経験の差異が論じられており、「親世代の移動の歴史的な背景と社会的な地位」が子どもの社会的イメージに影響する状況を描いている。本章では位相Ⅰの2人の聞き取りが書かれているが、位相Ⅰの当事者の場合には、生まれ育った地域では偏見が強いために町を去った人が多く、聞き取り調査が難しかった著者の経験が述べられている。

第7章の「「日本人らしさ」がもたらす人種化の力学」では、家族、学校、ストリートを制度として捉え、各制度のなかで直面する問題を論じている。当事者家族のなかでも片親の出身国に対する偏見が解消されず、家族によって子どもに差別的な言葉が投げかけられる状況も存在する。第8章の「「日本人」と「外国人」に二分される世界を生きる」では、ライフコースに沿って各々の段階における経験や考え、そしてその変化に注目する。義務教育を受けていた時期には、「みんなと同じようにしようと必死に空気を読」むなど、周りとの違いを否定的に捉えた当事者が、大学に進学し、同化に対する圧力が減少するなかで、「もうぜんぜん目立つのも平気になった」（418頁）という経験が述べられている。他にも「外見や名前が目立つことが、客が自分や店を覚えてくれることにも有効に機能していると感じ、「もう全部プラスに変わった」（423頁）という考えの変化など、ライフコースのなかで「ハーフ」であることを肯定的に捉える「ターニングポイント」を見つけていくプロセスが論じられている。

* * *

ここでは、本書の主張と分析の枠組みをもう一度確認したうえで、それに関連するいくつかの意見を挙げたい。

本書は、オミとヴィナントの「人種プロジェクト（Racial projects）」の概念と「人種編成論 Racial formation」に依拠し、「日本社会で最も強力なヘゲモニックに作用している人種プロジェクトである「日本人」「外国人」という二分法が、いかに人種概念によって支えられているのかを考察したい」（44頁）と課題を設定し考察結果として、「「日本人」と「外国人」という日本社会に浸透する強力な二分法の人種編成」（27頁）が「ハーフ」をめぐる作動していることを論じている。

本書の分析が依拠するオミとヴィナントの人種編成論は、アメリカ合衆国内の人種主義における「人種」概念がどのような社会的メカニズムによって構築されているかを理論化したものである。オミとヴィナントの分析によると、「人種は、社会構造と文化的表象が会う「交差路」」（2015：124）であるとし、「人種」

をめぐる社会構造と表象は、単独で存在するのではなく、社会構造と表象が互いを参照し影響するなかで、「人種」の意味が構築されると指摘した。その分析において人種プロジェクトは、構造と表象がリンクするメカニズムを究明するために提示した概念であり、マクロレベルの国家政策、経済状況、ミクロレベルの個人間の相互作用まで遍在する人種認識を、有機的な観点から捉えることに意義を持つ。

本書の主張と分析の枠組みについては3点ほどの論点が考えられる。1つ目は、日本の「ハーフ」をめぐる社会認識の状況を「二分法の人種編成」として整理することの妥当性についてである。人種主義はヒエラルキーの構造を持っており、日本における「人種」意識も、人種主義一般の特徴と離れたものとして考えることはできない。例えば「ハーフ」である個人を「日本人ではない人」と判断する「二分法の人種編成」の思考が現れたとき、その思考は「日本人ではない」という判断で留まるのではなく、どの国家の背景を持っているかという意識に繋がる。世界の不均衡な経済状況によるヒエラルキー的な国家認識が存在するなか、背景にある国家から連想するイメージが「ハーフ」の個人に影響することは、容易に想像できるものであろう。実際に本書のなかで語られる当事者の経験には、どの国の背景を背負っているのかによって、日本社会で受ける反応にかなりの差が現れることを窺うことができる。このような状況を考えるとき、「二分法の人種編成」という結論は、「ハーフ」の個人における経験の差が捨象されてしまう危険性があるのではないだろうか。

2つ目の論点は、「日本人」「外国人」という二分法が分析の結果としたら、その結果はナショナリズム(国民国家論)の枠組みで分析可能なものであると思われるが、本書が人種編成論を用いることの積極的な意味はなにかがはっきり示されていないことである。単一民族イデオロギーに基づいた「日本人」と「外国人」の区分、そしてそれによる他者化と排除の問題に関しては、ナショナリズム分析として議論されてきた蓄積がある。本書の分析は、ナショナリズム分析一般とどの側面で異なるのか。

3つ目の論点は、人種プロジェクトの概念を日本社会に適応することの整合性についてである。人種プロジェクトは、マクロレベルの国家政策、経済状況、ミクロレベルの個人間の相互作用まで遍在する人種認識を、有機的な観点から捉えることを可能にする。しかし本書が提示したマクロレベルの状況を見ると、「ハーフ」をめぐる国家政策としては「無差別」のロジック(106頁)、「日本人の血」の論理による法的優遇(189頁)があり、「ハーフ」を「日本人」のカテゴリーに包摂しようとする人種プロジェクトが窺える。反面、日常レベルの相互作用における人種プロジェクトを見ると、「ハーフ」を「外国人」として見ようとする

る認識作用が強く、マクロとミクロのレベルにおける認識の有機性を説明することは難しい。また人種プロジェクトは、経済状況をも含む社会構造と結びつく概念であるが、本書の調査は主には日本社会の「ハーフ」に対する認識に問題を集中しているため、元の概念と著者による適用にはズレがあるように思われる。

私は本書の内容を、日本の人種主義とナショナリズムとの接合状況に対する分析として理解した。人種プロジェクトを通して構築される人種概念と民族国家主義は、お互いの論理を取り入れながら排除の論理を作っていくのであり、関連性が高い。ただ両方は必ず一致するものではなく、状況に応じて個別の論理を進展させる。本書が依拠する人種編成論はアメリカ合衆国における人種認識を理論化したものであるが、アメリカにおける人種を軸とする排除と差別の論理は、民族国家主義を経由せずとも作動している。逆に民族国家主義による排除も、人種主義の論理を採用することなく作動し得る。韓国では現在、中国出身の朝鮮族、朝鮮民主主義人民共和国出身の人びとの割合が増えているが、彼らに対する差別、排除は、古典的な意味での人種主義とは異なる論理を持って現れる。日本社会の場合も、日本に居住している日本のルーツだけを持つ日系人が日本社会での他者化される状況を考えると、「人種概念によって支えられ」ていない排除の論理が存在することが窺える。本書が取り上げる具体的な状況から、人種主義とナショナリズムが日本の現代史のなかでどのように接合し変化しているのか、考察できるのではないかと思われる。

次は、第2部の内容を中心とする感想と意見を述べたい。第2部は、聞き取り調査に基づく生活史分析を通して、著者の「混血」や「ハーフ」と呼ばれる人々の生きる姿を伝えたい（446頁）という意図がよく生かされた内容である。当事者の声を丁寧に伝える生活史の研究は、読者が読書の行為を通して他者の経験に関する知識を得ると同時に、他者の立場から状況を考えてみる契機を作る方法である。「日本人」／「外国人」の二分法のステレオタイプに基づく安易な認識を持っている私自身を含む多くの読者が、そのようなステレオタイプが誰かを傷つけることになる可能性があることを、本書を通して考えさせられたのではないだろうか。

未だに単一民族という観念に基づく考え方が強く残存する日本や韓国において、そのような認識の問題性について指摘することは、とても重要な作業である。ただ、日本社会や韓国社会において構成員の身体的な特徴の同質性が比較的に高いことは、本書の議論を精緻化していくために考慮すべき側面ではないかと思われる。身体的な特徴の異なる人びとが社会の構成員として、ある程度の規模を持って現れた期間が短かった分、彼らが同じ社会構成員であるという認識を定着していくための社会的な議論のプロセスが十分に経験されていないのである。

また本書は調査対象者の確保の難しさのために、第2部が主に20代前半の若い世代の語り集中されているが、もう少し長いスパンのライフコースを持つ個人の経験を取り上げることによって、より豊かな観点が生まれたのではないかと考える。本書には、語り手たちが成長期を経て、他者の排他的な視線を乗り越える「ターニングポイント」を見つけた経験に関する記述があるが、このような経験はとても印象深く、かつ重要なものであるように思われた。個々人が成長するなかで見つけていくターニングポイントは、「ハーフ」を「問題」としてではなく、ポジティブな個性として再定義していくために、何よりも重要なプロセスであろう。そしてそのような契機は、同一化の圧力が強い学校という制度を出て、自分の人生を設計することができるある程度の年齢になった当事者から、より多く聞くことができたのではないだろうか。

例えば本書が取り上げた印象深い一つの事例を考えてみたい。イーサンさん(20代、男性、父親がアメリカ)は、仕事で出会った外国人女性の子供が学校でいじめを経験したことを聞き、「怒りを感じ(…)直接その小学校に赴き、いじめの実態について校長と教頭に訴えかけた。そのことがきっかけで、イーサンさんを迎えた全校集会が開催され(…)自らのいじめの経験について語り、それらのいじめがなくなるように訴えかけた」(423頁)。このような出来事を経て彼は、「ハーフですごいよかったな」という思いを持つようになったことを語る。置かれた状況を受動的に受け入れる姿勢を打ち切り、他者の視線を跳ね返す能動性を持つ契機を見つけたのである。「ハーフ」であることを自分の個性として肯定的に受け入れる契機を見つける経験の提示は、どのような展望を持って本書が取り組んだ問題を解決していくのかとも関わるものである。「ハーフ」であることを理由に人種化・他者化しようとする認識に対して、その認識が持つ問題を指摘することはもちろん大事な作業であるが、問題の根本が、非常に狭く設定されている「日本人」という枠組みにある以上、その狭い「日本人」の枠組みを内から突破していく可能性と契機を、当事者の経験を通して示すことも、本書だからこそできるものであると考える。

細かいところであるが、第2部の各章が類似の問題設定をしており、内容の重複が見られた。第7章の制度として学校、労働の現場から何が見えるのかの内容は、第8章のライフコースの分析において学校、職場の話として再び登場するため、同じ語り取り上げられるところが見られる(りな 367=396, 亨375=420, 知絵 377=409)。制度別の分析とライフコースにおける制度経験は、実際には重なる問題なので、もう少し工夫が必要だったように思われる。

* * *

本書を手にとると、カタカナのミドルネームが入る著者の名前が目につく。本書が著者の身近な経験に基づいた問題意識から出発していることを予感させるものであるが、本書の表紙に写っている丸い目を持つ少女は、著者の母親であるという。著者はあとがきにおいて、自身の母親が、米軍人であった祖父と日本人女性の母親のあいだで戦後まもない1950年に沖縄で生まれたことを書き残しており、ミドルネームは、祖父の名前から受け継いだものであるという。

本書の問題意識、「混血」、「ハーフ」と名指されてきた人々は「なぜ、「日本人」とはみなされないのか。なぜあまりにも偏ったイメージで眼差されるのか。なぜ、母親の世代から今の若い世代まで、人種差別の問題は放置され続けているのだろうか」（446頁）という問いの原点には、「「人種」や「エスニシティ」の揺らぎを生き」（448頁）た著者の個人史がある。著者は「「私自身を知る」ということにもつながり、研究は簡単にはいかないときも」あり、著者個人の経験を、社会的・歴史的の文脈のなかで読み返す作業が「「アメラジアン」というルーツを受け入れる」（448頁）ことに繋がったことを語る。またこのような著者自身の経験は、本書が当事者たちの経験を聞き取るうえでもとても大事な力になったに違いないだろう。

本書は、個人の経験を社会・歴史的に位置付け、他の個々人の経験と接続する地平を獲得していくプロセスであった。著者が社会・歴史的な地平から自分の経験を理解するプロセスを通して自分を「受け入れる」ことができたように、本書は、「ハーフ」と呼ばれる人々が自分をエンパワーメントするための言葉を探るとき、貴重な手がかりになるのではないだろうか。

参考文献

- 岩淵功一編 2014『〈ハーフ〉とは誰か』青弓社
- 川島浩平、竹沢泰子編 2016『人種神話を解体する3：「血」の政治学を超えて』東京大学出版会
- Ahn, Ji-hyun. 2018. *Mixed-Race Politics and Neoliberal Multiculturalism in South Korean Media*. Palgrave Macmillan
- Aspinall, Peter and Miri Song. 2013. *Mixed Race Identities*. Palgrave Macmillan
- Omi, Michael and Howard Winant. 2015 (3rd Edition). *Racial Formation in the United States*. Routledge
- Rocha, Zarine L. and Farida Fozdar ed. 2017. *Mixed Race in Asia: Past, Present and Future*. Routledge

Rondilla, Joanne L., Rody P.Guevarra Jr. and Paul Spickard. 2017. *Red and Yellow, Black and Brown: Decentering Whiteness in Mixed Race Studies*. Rutgers University Press